機関紙『東京ＹＷＣＡ』NO.786　（2022 年 12 月号）

クリスマスメッセージ
世界の隅で起こったこと

マリア・グレイス笹森 田鶴（日本聖公会北海道教区主教）

さて、その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が現れ、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、すべての民に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。

（ルカによる福音書 2 章 8～11 節）

教会では、クリスマスのあいさつに「クリスマスおめでとう」と言い合います。けれどもイエスが生まれた頃そこで起こっていたことは、決して社会的には手放しにおめでたいことや当然の喜びという出来事だけではない、不思議な出来事の連続でした。

母親となったマリアは恐らく 13 歳から 15 歳ぐらい。結婚する予定のヨセフに身に覚えのない妊娠が発覚。世間に知られたら石打の刑です。それでも産む決意をして何とか穏やかに過ごしていたところ、住民登録のために突然家を出て、ヨセフの出身地に一緒に旅をしなければならなくなります。その旅先で産気づいたマリアは宿屋にも泊まれず、急遽見ず知らずの家の中の、家畜がいただろう、騒々しく落ち着かない場所で出産を迎えたのでした。当時の若い女性にとって、我が人生が自分の思い通りになるなどとは到底考えられない時代ではあるものの、それ以上に想像を越える、自分にとってはあまり好ましくない出来事が次々と降りかかります。どんなにか不安と怯えの日々を過ごしていただろうかと思います。マリアは、今、息をして、目の前のことに対処しているだけで精一杯です。

そこに訪れてきたのは羊飼いたちでした。彼らは仕事上、真っ暗闇の中で野宿をしていると、神の使いが突然現れ、あまりの輝き明るい様子に驚き恐れます。それでもようやく事態を飲み込み、イエスの誕生を知り、見ず知らずの赤ん坊に会いに、夜も明けない時刻に出かけていきま

す。当時羊飼いという職業は、人々から蔑まれていた、貧しさと厳しさの象徴のような職業でした。彼らは、自分たちが急に押しかけては嫌がられるのではないかと、恐る恐る救い主のいる所に近づきます。そして彼らは若い家族に迎え入れられ、小さな姿の救い主に会うことができたのです。人生でこれほど輝き、幸せな気分になれたことは今までありません。どんなにうれしかったことでしょう。

クリスマスの物語は、世界の隅で起こっている、世間では見過ごされがちな、むしろ差別されている人々という登場人物たちの積み重ねの出来事のように綴られています。この登場人物はすべて、貧しく、家も定まっておらず、先の見えない状況の中で日々生きていくことでようやく過ごしている人々です。そのような人々の間にイエスが誕生したのです。このことの意味は、神は、高みにあって人間世界を見下ろしているお方なのでは決してなく、人間の一番つらく、悲しく、厳しい現実の只中にともに生きようとされるお方であるということを示しています。

神は、このどうしようもないわたしたちの世界、分裂と不和、不正義と諦め、無理解と差別の現実が満ちている世界にわざわざ身を置き、絶望や不安、恐れやおののき、悲しみや痛みを覚えてようやく生きている人々のためにあろうとしてくださっているというメッセージです。

教会はそのことを祝います。そして互いにあいさつします。「クリスマス、おめでとう。神はこのような世界に痛み、悲しんでいるあなたを救うために来てくださいました。心の固くなってしまっている、生きることがつらいと思っているあなたと、ともにいるために来てくださいました。そして世界を変えてくださろうとしています。わたしたちもその出来事の起こっている場所に呼ばれています。」